
 所 報

1. 研究室活動報告

1967年夏に都留春夫所長が出張でフィリピンに赴いたあと、小林哲也助教授が所長に選任された。

研究所の活動を活発にし、その多面的発展を計るために研究所規則改訂の検討をすすめる一方、教育研究所談話会をもつことに決め、本年は次のように開催した。

第1回 1967年10月28日

「フレッチャーの situation ethics について」川瀬謙一郎助教授

「脳の発達と学習」 原一雄助教授

第2回 1967年12月18日

「青少年に対するテレビの機能」 布留武郎教授

A. 教育哲学研究室

本学の教育哲学関係教員及び大学院学生を主なメンバーとする ICU 教育哲学研究会は次のような例会を催した。

第5回 1967年12月2日

「社会哲学と教育の問題」 川瀬謙一郎助教授

第6回 1968年2月10日

「近代日中における価値意識の転換をめぐっての考察——福沢諭吉と嚴復の場合——」 宇野美恵子氏

第7回 1968年3月16日

「キエルケゴールの思想における主体性」 姜 誠一氏

宇野、姜の両氏は本学大学院修士課程修了後、引続いて博士課程において研究中である。例会ではそれぞれ、修士論文を中心として発表した。

次に部門別にスタッフ各個人の研究活動状況をみてる。

a. 教育哲学

日高教授（客員教授）：昨年に引続いて客員教授として「教育基本法」の由来と思想的背景について講義を担当している。

小島教授（客員教授）：1967年3月に退職、同年4月より大学院の顧問及び客員教授として博士修士の両課程で授業を担当している。主たる関心を Social Planning としての教育の問題において研究活動が続けている。

讃岐助教授：今年度は、20世紀初頭から現代に至るまでの、アメリカにおける教育思想の動向を、進歩主義教育運動を中心として研究した。ことに1950年代以降に

における教育思想の状況を、ジョン・W・ガードナーおよびロバート・ウーリッヒに即して研究して来ている。

1967年10月14日、金沢大学で開かれた第10回教育哲学会大会において、「J. W. ガードナーの教育思想とその現代的意義」と題する発表を行った。

川瀬助教授：1966年9月より1967年6月まで米国ハーヴァード燕京研究所に Visiting Scholar として研究に従事。ピューリタニズムの教育思想を主題とする予定であったが、むしろその基盤としての社会倫理を中心とするにとどまった。帰国の途次ヨーロッパをまわり8月上旬帰着。現在、大学における教養の理念の研究に手をつけている。

黒田助手：デューイの教育思想との関連において、教育目的についての研究をつづけ、特にフェニックスの教育哲学における成長、発展と価値の問題を中心として学んでいる。

b. 基督教教育哲学

長教授：一年半ばかり海外にすごしたが、その間の活動としては、日米知的交流委員会より派遣され、1965年10月よりプリンストン大学に一年間滞在、他の諸大学にも講義に行った。その後、ハーバード大学東アジア研究所に招かれ、半年間滞在し、研究生活をおくった。その間、ロバート・ハチンズ博士の招きにより、1966年5月には「民主主義機関に関する研究所」の研究会（於ジュネーヴ）に出席、同年7月には WCC（世界教会協議会）主催、「教会と社会」の世界大会に日本代表として出席した。1967年1月末よりヨーロッパ、アジア諸国を経て同年2月末帰国した。

研究活動としては、プロテスタンティズムと日本の伝統的精神構造とのかかわりにおいて人間形成の課題を問うているプロセスにおいて、近代日本教育思想史の問題として取り上げてきた「ペスタロッチ受容の方法と問題——高嶺秀夫と石井十次、留岡幸助の人間把握の対比をめぐって」「新渡戸稲造の教育思想」「加藤完治の農民教育思想——国民高等学校運動と満州開拓団」等の諸論文を他の諸論文と共に一書にまとめ、『土着と背教——伝統的エトスとプロテスタント——』（360頁）と題して1967年2月、新教出版社より出版した。これは、さきに出版された「人間観の相剋」（1959年弘文堂）、「天皇制思想と教育」（1964年、明治図書）等につづく課題を取扱った仕事である。これらにつづく仕事としては「背教者の系譜」、「裏がえしのプロテスタント」等をまとめてゆく予定である。

秋田教授：研究課題「人間形成のキリスト教的基礎——キリスト教教育哲学への試み——」の基礎論としての人間論の一部として、論文「予言者の歴史的実存自覚」をまとめたが、これは理想社近刊の論文集（日本倫理学会編）に載せられる。主題に関連した種々の問題に関し、学会その他で研究報告をし、また、二、三の雑誌への寄稿などを行った。

関屋講師（非常勤）：1967年4月より東海大学に教授として迎えられ（文学部）、フランス語と宗教の授業を担当している。67年度には本紀要12号に「実存としての日高先生」を寄稿した他、「ケーベル博士の大学論」（ICU 学報「キリスト教と文化」第3号）、「平和国家論——一人文科学研究者の主張——」（東京独立新聞，68年2月15日号掲載）等を寄稿した。（なお、関屋講師は別に御自身の営まれる「学寮」の近況について便りを寄せられた。

「本紀要第12号（1967年2月刊）「所報」の項に記されたように、私は66年の夏の終り、ICU 専任教授の身分を退かせて頂いた。この機会に、それ以前から考えていた事であったが、「大学生女子の為の、小さな家庭的な学寮」実現の仕事に取掛った。三鷹市役所にほど近い、わたくし所有の土地に、目的にかなう建物が出来上ったのは翌67年2月下旬のことである。プレハブ建築二階建、建坪はすべてで40坪余りという小さなもので、寮生の収容能力は十名以下である。竣工と同時にかねて入寮を希望していた数名がまず入居した。新学年の始まる頃には、全員8名揃っての生活となった。この営みは、全くわたくし共夫婦の共同責任による独立のもので、何れかの大学乃至は団体の要請に依ったのではない。ただこんな営みについて、ここに記述させて頂くのは、未だにわたくしが ICU 教育研究所に外から参加している者であること、そして研究所開設の当初から私は「キリスト教教育哲学」部門の所属であったが、この営みは全くわたくしの「キリスト教教育哲学」の実践への試みと言えるからである。

I. 聖書の精神に基礎をおくこと、II（大学生の学寮として）学問研究に対し真摯であること、III. この学寮への参加者が「切磋琢磨、生活の内から学ぼう」との意欲と謙虚さを有すること——そして善き精神的共同体 *spiritual community* の実現を常に目指していること——、以上三つがこの学寮生活の基本的要素である。

このような、東京の片隅での極めて微々たる営みに拘わらず、教育殊に大学教育に深い理解、或いは好意を寄せて居られる先輩、友人の有形無形の支援に依り、発足後満一ケ年を過ぎた所であるが、幸いに寮に参加した全員が上記三原則をふまえて、自由な雰囲気の中に平和にして実践的共同的な、そして愉快的生活を推進して来たと報告することが出来る。」

c. 比較教育学

小林助教授：1967年6月日本比較教育学会第三回大会でシンポジウム「各国の高等教育改造計画」に参加しアメリカの事例について報告した。また同大会において学会理事に選出された。同年10月エドモンド・キング著「教育研究の世界的新動向」を大学院学生田中力君の協力を得て翻訳「教育学全集1，教育学の理論」（小学館）に掲載した。また「教育学全集13，学校と教師」（小学館，1968年春出版予定）に「教育行政の過程」を掲載する。その他雑誌「教育」「教育展望」「教育じほう」「世界教育事典」（帝国地方行政学会未刊）などに比較教育学に関係する論文や記事を

寄稿した。現在研究を進めているものの一つは三島海雲記念財団の奨励金による教養教育に関するもので、その一部は「教育研究」13号に発表されている。また小川隆雄助手の協力を得て ICU で教養教育に関する資料を蒐集整理中である。もう一つの研究は1967年度文部省科学研究費（個人研究）による「科学者と技術者の一般教養に関する比較研究」である。その他の活動としては1967年10月東京で開かれた日米教育交流会議への出席がある。

デューク助教授：1967年9月より12月まで米国へ旅行した。これは1968年の夏に行われる日本地域研究セミナーへの参加者の募集と新しく日本語セミナーを1968年度に ICU で開催する準備交渉のためである。1967年10月には「日本教職員組合一戦いの20年史——」という日教組についての博士論文提出のためロンドン大学の博士課程に籍を置いた。現在「教育学研究」の編集（英文関係）に加わっている。発表した主な論文は次の通りである。

1. THE POSTWAR TEENAGE STUDENT IN JAPAN, School and Society, April 16, 1967
2. THE IMAGE OF AN IDEAL JAPANESE: A NATIONAL GOAL, The Educational Forum, November, 1967.
3. 「現在アメリカ教育の動向：地方分権的多様化と中央集権化」, 1967年5月, 教育学研究刊行予定
4. JAPANESE EDUCATION IN THE POSTWAR ERA, Holt, Rinehart and Winston, 本年出版される予定

現在の研究主題としては、1. 日米両国の高校生の政治的、社会的諸問題に対する態度の比較研究、2. 日教組の歴史的研究

B. 教育心理学研究室

1967年は ICU にとって、また教育心理学研究室にとって、悲嘆の年であった。

前年定年退職され、上智大学に移られたのちも ICU の大学院の教育学博士課程を助けて来られた岡部弥太郎先生が、3月14日早朝卒然と永眠された。前立腺障害のため九段坂病院に入院手術され、その後の経過がよく退院され、新装成ったご自宅に帰られた直後、脳出血のため72年のご生涯を閉じられた。3月17日午後上智大学イグナチオ教会で行われた告別式には、研究室全員が参列してお別れを申し上げた。後日ご遺族から先生の生前愛用された図書多数のご寄贈があり、一部を ICU 図書館に保管して閲覧に供するとともに、大半を「岡部記念文庫」として研究室で保管して利用させていただくことになった。3月下旬、社会心理学専任講師として Dr. Helmut Morsbach が夫人同伴で南アフリカ連邦共和国から来任された。4月には、これまで7年間、教育心理学・中等学校におけるガイダンス・宗教心理学などを教えて来られた Marie Bale 助教授が定年退職され、韓国の梨花女子大学に移

られた。また、東尚子助手は、ご結婚のため退職された。7月には都留教授が、日本政府派遣教授として「日本の教育」講座を担当のため、フィリピンの *Atheneo de Manila University* に赴任された。10月、1年間の休暇を終えて星野助教授が復職した。また新しく非常勤助手として、2年間アメリカに留学して来られた山本勝美氏が来任された。こうした動きにともなう、当分の間毎週月曜日の午後研究室会議を開催することとなった。

なお、7月14、15、16日の3日間箱根大平台の弥千代荘において恒例の夏季心理学セミナーが行われた。研究室スタッフ4名、学生約10名が参加した。これは同時に I・C・U の活動であるが、同会のその他の活動としては、10月に新任の山本勝美助手の歓迎会を開いたのを皮切りに、国立武蔵療養所、東京教育大学教育相談室などの見学を行った。68年1月に入って来日された Bale 先生を囲んでの懇談会が持たれた。なお2月には精薄児施設、3月には卒論発表会及び卒業生の経験を聞く会が企画されている。

星野助教授：I. 1) 1967年10月より68年9月まで京都大学人文科学研究所において日本学術振興会流動研究員として「重層社会の研究」班に属し、毎週の例会に出席するとともに、「社会化過程」と「歴史経済的現象の社会心理的要因」に関する研究を分担して、随時同研究班員との討議や研究発表を行った。また、在洛中に、京都大学教育学部教育心理学研究室・医学部児童精神医学教室・京大人類学クラブ「近衛ロンド」などにおいて、「社会化過程」・「ロールシャッハ法によるパーソナリティ研究」・「McClelland 著 "Achieving Society" の紹介と検討」・「土居の『甘え』理論の紹介と検討」などを通じて意見交換を行った。2) 児童生徒の社会化過程に関する6ヶ国共同研究については、日本における集計結果の検討とまとめを続けてきたが、共同研究者の分散と負担増加、および研究費会計の硬直化のために予定より進捗が遅れている。3) 文部省科学研究費による総合研究「家族関係と人格形成」第2班の分担研究者として、前年度に作成した "achievement orientation scale" その他の方法を用いて、東京都内の小・中学校児童生徒に調査を実施し、また7月18～23日には、鹿児島県喜界島の小・中学校で調査を実施した。目下集計中である。

II. 学会発表としては1967年7月の日本心理学会第31回大会シンポジウムXI自己・自我と適応において「20答法 (T. S. T.) による自己態度・自己観の研究」の口頭発表を行ったほか、8月の日本教育心理学会第9回総会においては「基督教主義学校生徒の宗教意識と宗教行為」の共同研究発表を行った。また10月の日本臨床心理学会第3回大会では、パネルディスカッション「臨床心理士の資格認定と本学会の研修」にパネラーの一人として参加発言した。(同学会に関連して機関誌「臨床心理学研究」の常任編集委員に指名された)。他に会員または講師として参加した学会・研究会としては、第64回日本精神神経学会、第13回日本精神分析学会大会、第11

回プリマーテス研究会, 第6回全国大学学生相談研究会, 基督教学校教育同盟保育分科会, 研究会, 石川県学校カウンセラー生徒指導講座, 富山県学校保健大会, 神奈川県教委主催「ワイド相談」などがある。

Ⅲ・著述 1) 山中みち子との共同研究「心身症のロールシャッハ反応に現われた身体像 (Body image boundary) の検討」臨床心理学の進歩1967, pp. 76~86, 誠信書房, 2) "Changes in the Social Structure and Social Attitudes of Inhabitants Subsequent to Urbanization: The Case of Fujisawa, Musashimachi Town, Iruma County, Saitama Prefecture," ICU Final Report of the Ford Research Project, pp. 165—178, 1967.

3) 「人格形成の社会・文化的背景」佐治・水島・星野共編, 臨床心理学の基礎, 第4章, 臨床心理学講座第1巻, 誠信書房 (印刷中)。

4) 翻訳: パーソナリティの診断, 今田恵編訳: オールポート 「人格のパターンと成長, 第4部, 誠信書房 (印刷中)。

5) 書評: G. DeVos & H. Wagatsuma; Japan's Invisible Race; Caste Culture and Personality (1966), 年報社会心理学, 第8号, pp. 235—243, 1967

原助教授: I 1) 「大脳皮質連合領損傷と学習」の研究に文部省科学研究助成金を受け, 国立武蔵療養所脳波室付属行動生理研究所に於て実験中, 同時に, 秋元波留夫, 清野昌一両医博と「てんかん性疾患の大脳半球転移」につき共同研究を開始した。2) 「大学生の生き方」につき, Semantic Differential 法を応用し, 人生観の価値構造を因子分析的に研究中である。一方昨年度に行った講演は, 3) 行動研究会に於て「大脳皮質連合領と視覚弁別学習」につき, 又 4) 岡山医大生理教室及び国立武蔵療養所医局に於て「学習心理と神経生理学」につき, 更に 5) 岡山大, 東京教育大の各心理学科に於て「生理心理学の方法論と展望」につき, なされたものなどがある。

Ⅱ・学会発表については, 1) 1967年7月の日本心理学会での「大脳皮質連合領の損傷が迷路学習に及ぼす影響」 2) 10月の日本社会心理学会における「大学生の価値観研究 (その7) ——在学中における職業的価値の変化」などがある。

Ⅲ・著述は大河内・貝塚・永井監修, 読売新聞社出版の辞典「現代を考える」に, 「試験」の章を担当している。

古畑助教授: I・Ⅱ・現在の研究テーマは「対人関係の心理 (対人関係と人格形成, 対人関係と学習を含む)」である。1) 一昨年来, 文部省科学研究費による試験研究「道德性の発達とその規定因」の分担研究者の一員として「家族集団, 同輩集団と道德性の発達」のテーマで研究を続行, 道德性テストを研究協力者と試作, その成果の一端は1967年夏, 日本教育心理学会第9回総会で, 研究協力者より発表した。2) 昨年度より, 文部省科学研究費による総合研究「家族関係と人格形成」の分担研究者として, 鈴木百合子助手及び研究協力者たる本学大学院学生2名とともに

に、「均衡理論の適用による母—子の態度に関する研究」のテーマを共同で遂行。1967年春の本学の大紛争により甚大な影響を蒙ったが、小・中学校数校で第1回予備調査、第2回中間調査を、そして第3回目には日本女子大附属中で一連の実験的本調査を施行、目下その資料を整理・分析中。1968年夏の日本心理学会第32回大会以降、順次その結果を発表予定。3) 1967年夏以降、本学布留武郎教授の「青少年に対するテレビの機能および逆機能」に関する文部省科学研究費による機関研究に、布留教授の指導の下、その分担研究者の一員として参加、準拠集団・所属集団に関する部分などの一部を分担した。

Ⅲ.〔A〕1967年以降刊行の著作(発行順) 1) 社会性の発達, 教師養成研究会(編)「新版, 幼児の心理」学芸図書, 43—60頁 2) 協同と競争; ボスとリーダー, 教師養成研究会(編)「新版, 幼児の社会性指導」学芸図書, 64—90頁 3) 集団における協同と競争, 「学級経営」2巻, 5号, 65—73頁 4) 教師・児童集団——人格形成の諸条件 b, 日本児童研究所(編)波多野・依田・他(監修)「児童心理学の進歩」(第6巻)金子書房, 221—236頁 5) 学級経営の原理, 宮田(編)講座・学級経営第1巻「学級経営の展望」明治図書, 62—106頁 6) リーダーとしての教師宮田(編)講座・学級経営第2巻「学級経営の創造」明治図書, 198—210頁 7) 人格的発達, 沢田・他(編)実践教育心理選集4, 「中・高校生の心理と教育」第一法規, 88—91頁, 104—107頁 8) グループ; グループ・ダイナミックス; コミュニケーション; リーダー; 他「教育実践用語辞典」全国教育図書 9) 集団のふんい気, 飯田・沢田・他(編)「生徒指導事典」第一法規, 216—220頁

〔B〕その他(未刊) 10) 村上・他(編)「家庭教育指導事典」帝国地方行政学会, 編集協力者及び2項目分担執筆。11) (翻訳) デ・ソト: 社会構造の学習, 田中靖政(訳編)「個人と社会」日本評論社 12) 学習と集団, 沢田・小口(編)「教育心理学」, 有斐閣 13) その他翻訳1冊改稿ならびに4編印刷乃至進行中。

モーズバッハ助教授: I. II. 1967年3月, ICU 教育心理学研究室の助教授に就任のため, 南アフリカ連邦共和国より来日。9月, ICU において, “Future Time Perspectives of Students in Different Countries” について講演。日本社会心理学会に入会し, 10月同会大会に出席。

Ⅲ. 著述は “Personal style in planning”, Journal of General Psychology; 1967, 76, p. 169—177 を K. Danziger と, “A cross-cultural investigation of occupational stereotypes in three South African groups”, Journal of Social Psychology; 1967, 73, p. 53—59 を Morsbach 夫人と, “A cross-cultural study of attitudes towards Capital Punishment in South Africa”, British Journal of Criminology; Oct. 1967, p. 394—403 を Morsbach 夫人と, “An investigation of attitude held by South Africans towards various national and racial groups” International Journal of Psychology, Paris,

France: 1967, 2, p. 289—297) を Morshach 夫人と執筆した。

鈴木助手: I. II. 1) 古畑助教授のもと、大学院学生 2 名と共に、先述の「均衡理論の適用による母—子関係の研究」の共同研究を行っている。2) 1967年 4 月より東京女子短期大学において一般心理学の非常勤講師を勤めている。III. 近日出版予定の依田他(監修)「新教育心理学辞典」金子書房に社会心理学関係の 10 項目を担当した。

山本助手: I. II. 1967年 8 月に Kansas City General Hospital における心理インターンを終了後、帰国途中、ロンドンの Tavistock Institute, エディンバラの Royal Edinburgh Hospital, チューリッヒの Jung Institute などを見学、10 月、ICU 教育心理学研究室に非常勤助手として加わった。11 月、東京臨床心理研究会の講習会にて「アメリカにおけるカウンセリングの現状」を、又 1968年 2 月には「H-T-P について」を講義した。また同会による公開講演会にて「Community Mental Health」について、さらに家庭生活センターの家族計画指導員研修会で「幼児の心理学的指導」を講義。67年 10 月に中野北保健所で幼児の心理的検診を行った。なお 68年 2 月に同所で、また 2 月、3 月に渋谷保健所で同種の活動を行う予定。研究活動は、現在辻正三先生を中心とする文部省試験研究「対人態度測定法の比較研究」に参加、また「幼児の集団遊戯療法」を研究中。参加した学会は、67年度日本臨床心理学会、日本精神分析学会。

III. 著述は、L. Blank, の “Psychological evaluation in psychotherapy” を水島・岡堂訳編のもとに第七・八・九章を翻訳、「臨床心理研究」に載せるため「海外情報」を執筆中。

C. 視聴覚教育研究室

1953年、ICU の創立以来 14 年間、当研究室と共にあった西本三十二先生が、今年度をもって停年退職された。先生は ICU に赴任されると同時に、視聴覚教育研究協議会、翌年からは放送教育研究協議会の二つの全国的な研究会を組織され、研究者の育成、実践の指導、視聴覚教育、放送教育の学問的向上のために努力されてきた。これらの協議会を 12 年間にわたって主宰されると同時に、大学院過程の中に、我国では唯一の視聴覚教育専攻科を設けられ、その充実につとめられて、数十人の卒業生を送り出されてきた。また、先生の活躍は単に日本国内にとどまらず、その広い国際的視野と各国人との豊かな交際を通して、初期においては主としてアメリカの学者との交流、後には我国の視聴覚・放送教育の紹介・普及を広く世界に広められた。昨年 4 月からは大阪の帝塚山学院大学の学長に就任されたが、ICU でも博士課程の学生のために客員教授として特に専門分野の相談を受けられる。また 1967年 6 月には石本助手がインディアナ大学留学のため渡米されるなどの動きがあった。例年本研究室主催による視聴覚教育研究協議会は本年度より日本視聴覚教育

学会として発展的に解消され、本研究室は、今後は学会事務局として協力することになった。本年度より布留教授を研究担当責任者とする文部省科学研究費による機関研究「青少年に対するテレビの機能と逆機能」に関する研究が向う3ヶ年計画ではじめられた。本研究には、教育心理学研究室の古畑助教授、鈴木助手、及び本研究室の中野助教授、平田助手が研究協力者として加わり、「テレビ視聴は一般に空想志向のメディア行動であり、青年期における過度のテレビ視聴は自我の発達に逆機能する」という仮説の検証とともに、過度の視聴行動を規定する社会学的、心理学的要因の解明を目的とする。本年度（第1年度）は高校1年生2200名を対象に、直接的、投影的質問紙法及び諸テストによる調査を行い、その粗集計をこの度終えて、現在、メディア行動と関連する社会学的、心理学的要因の相関行列、重相関、偏相関を求める演算のプログラミング作成中である。

布留教授：は上記文部省機関研究の計画、調査用具の作成、データの解析方法等について中核的活動を行なったほか、次の論文を発表した。

1. 「ラジオドラマと聴覚」NHK総合放送文化研究所創立20年記念論文集，昭和42年11月，323—361.

この論文はラジオドラマの認知過程を形態心理学の立場から記述・分析して、そこからみちびきだされた理論の一部に対して実験的アプローチを試みたもので旧稿の改訂版である。

2. “Die Funktionen des Fernsehens bei Kindern.” *Fernsehen und Bildung*, Internationalen Zentralinstitut für das Jugend- u. Bildungsfernsehen, München, 3/4, 1, 1967, pp. 124—132.

この論文は1967年3月に発表した英文の論文（*Studies of Broadcasting*, No.5, pp. 5—48, NHK）がドイツ語に抄訳されたもので *Fernsehen u. Bildung* 誌の求めに応じたのである。なお、原論文の書評が *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Socialpsychologie*, 19, 1967, Heft 4, pp. 756—757. に掲載され、比較文化論的研究として高い評価をうけている。

3. “De vera; Educational TV in Japan について” コミュニケーション第2号，上智大学，昭和43年3月（発行予定）

また、現在教育社会学会評議員、視聴覚教育学会常任理事、同学会機関誌「視聴覚教育研究」の編集責任者、日本放送教育学会常任理事等をつとめている。

中野助教授：研究テーマは、1) 教授・学習過程における映像の機能（NHK 研究奨励金を得て、東京都放送教育研究会の共同研究）、2) 言語相対主義、翻訳の問題の心理言語学的研究（言語心理学懇話会の会員との共同研究）、3) 外国語学習と評価の研究（日本語学ラボラトリー協会「評価に関する特別委員会」のメンバーとして共同研究）。1967年4月以降執筆した著作（出版進行中を含む）は、金子書房刊『学習心理学ハンドブック』のうち第24章「視聴覚教育」、小学館・教育学

全集④『教授と学習』のうち、第6章「教授メディアと教授組織」、日本標準テスト研究会・現代教育研究③『学習の構造』のうち「映像効果」ほか数項目、全国教育図書・学校教育全書⑩『外国語教育』のうち「放送教育」小学館『ジャポニカ大百科』のうち「学校放送」ほか2項目。“A Trend of Programmed Instruction in Japan”が、*Report of the WCOTP Audio-Visual Workshop* に採録。その他雑誌、「中学校教育研究」、「中学校教育」、「放送教育」、「近代教育」、「放送教育」、「視聴覚教育」、「教具と教材」、「VTR 教育」、「学校放送通信」、「社会教育」、「英語教育」、「現代英語教育」に寄稿。

なお前年度に引き続き、日本視聴覚教育学会常任理事、同紀要編集委員、日本放送教育学会常任理事、日本教育学会紀要編集委員、語学ラボラトリー協会運用委員、同特別研究委員会委員として参画。文部省「視聴覚教育研究企画委員会」および「視聴覚教育専門委員会」の委員、文部省「放送と教育に関する委員会」の委員、NHK英語番組委員会の委員、放送教育研究全国連盟のコンサルタントとして、それぞれに参画する。

平田助手：は第4回日本視聴覚教育学会大会（於お茶水女子大）において「視的バランスにおける左一右の問題」と題する研究発表をした。またその後の実験結果は人間知覚体制の見地から *Visual Balance under Three Viewing Conditions: Binocular, Dominant Eye and Non-dominant Eye.*” と題して *Psychologia* 誌（1968, vol. 11, No. 1・2 記念号）にまとめられた。現在は布留教授の指導のもとに上記文部省機関研究の調査の実施と集計にたずさわっている。

D. 理科教育研究室

1967年度は、日本において理科教育研究に始めて文部省の科学研究費が交付された、理科教育にとって特記すべき年である。当国際基督教大学大学院理科教育法研究室においても原島鮮教授を代表とする総合研究「高等学校物理における教材と教具の研究と試作」（ICU 他9大学、計13名）に190万円が、篠遠喜人客員教授を代表とする総合研究「生物教育の基礎的研究」（ICU 他9大学、3理科教育センター、計15名）に150万円がそれぞれ交付された。この総合研究は3年継続の予定であるが第1年目として、原島教授は「大学物理教育へのコンピューターの導入、およびコンピューターを利用した教材映画の作製」を中心とした研究を行ない、篠遠客員教授は中山講師とともに「諸外国における生物教育の現状」、「小・中・高校および大学一般教育における一貫性」などについて、また中山講師は「理科学力の構造およびその評価」についての研究をそれぞれ行った。

原島教授は1967年12月にオランダの Eindhoven で開かれた International Union of Pure and Applied Physics の Commission on Physics Education 委員会に夫人とともに出席し「Development of Physics Education in Japan」

と題し講演を行なった。篠遠客員教授は1967年1月に日米それぞれ10名ずつの代表による日米科学会議、「大学における生物教育」を主催し ICU もその会場として用いられた。D. Worth 教授は核物理の研究に、大内教授は新たに購入した NMR を用いての研究をそれぞれ行い、湊助教授は総合研究「高校化学教育基準に関する研究」（代表 玉虫文一 東京女子大教授）の一員として参加するとともに、TV、学会などにおいて活躍をした。助手から1967年度に講師に昇格した中山講師は1967年5月にベルリンで開かれた「教育評価の可能性と限界」と題する国際ワークショップにアジアからの2名の代表の一人として招待され、二つの招待講演を行うとともに、5人のリーダーの1人として会議の運営に当たった。また同講師は第21回生物教育会全国大会の講師として招かれた他、11カ所での現職教員教育の講師として奉仕をした。

生物教育の担当の S. Hoslett 教授は1年間の休暇で帰米され、その後任として沖垣助教授が生物教育を担当した。

2. 大学院教育学研究科修士論文

(1966年度及び1967年度卒業者)

1967年3月卒業者 12名

A. 教育哲学(4)

- | | |
|-------|---|
| 姜 誠一 | キルケゴールの思想における主体性 |
| 小村 俊之 | マカレンコのエデュカシヨナル思想と方法の形成過程の一考察—『教育詩』を中心として— |
| 谷 敦雄 | キリスト教教育哲学への試み—イザヤ書及びエレミヤ書における人間理解を中心に— |
| 宇野美恵子 | 近代日中における価値意識の転換をめぐっての一考察—福沢諭吉と嚴復の場合— |

B. 教育心理学(2)

- | | |
|-------|--|
| 足立美智子 | 心理治療者の「わかり」のしかたについて |
| 武藤 道代 | いわゆる学校恐怖症に関する研究—2つのパーソナリティテストによる資料の因子分析(Q-技法)を通して— |

C. 視聴覚教育法(2)

- | | |
|-------|---|
| 長谷川 啓 | An Experimental Study of the Identification of Filtered Japanese Vowels |
| 金田 正也 | テレビ学校放送英語番組の構成についての一考察 |

D. 英語教育法(4)

- | | |
|-------|--|
| 日浅基志子 | The Position of As-Clauses in the Works of Hemingway |
|-------|--|

- 升川 潔 A Study of Syntax within a Limited Vocabulary
 清水由理子 On the Syntax in Sir John Mandeville's Travels—Especially on the Verb Syntax—
 田所南美子 Linguistic Atlas: What can it do to English Teaching in Japan

1968年3月卒業者 11名

A. 教育哲学(2)

- Chowdhury, Eskander A. A Theoretical Approach to the Role of Education for National Development

呉 得 栄 ペスタロッチによる人間形成探求へのキリスト教的理解

B. 教育心理学(1)

- 新井 弘子 集団過程による人格変容の研究 —Sensitivity Training を中心として—

C. 視聴覚教育法(1)

- 塩見 武雄 テレビジョンの暴力場面が攻撃行動に与える効果

D. 英語教育法(4)

- 市川 幾子 A Study of Verb-Particle in W. Wycherley's *The Country Wife* and W. Conreve's *The Double Dealer*

峯川 紀子 Summary of the Infinitive in Shakespeare

若松 孝慈 On the Syntax in Geoffrey Chaucer's *Troilus and Criseyde*—Especially on the Adverbial Clauses—

渡辺美奈子 The Origin of the Regional Variations in American Pronunciation: A Historical Study of the Sounds of *r*

E. 理科教育法(3)

- 久田 隆基 第I部 日本化学会「高校化学教育基準に関する研究」委員会報告書に関する考察 第II部 ボリアミン—ヒドロベルオキシド—鉄系によるラジカル発生の機構

大館 一夫 相対論の高校・大学初年級の物理教育へ導入する為の基礎研究 (特殊相対性理論の幾何学的表示)

渡辺 正久 高等学校および大学初年級における熱力学教育の研究

1967年7月卒業者 3名

英語教育法(3)

- 井上 雅子 A Contrastive Study of Nominal Constructions in English and Japanese
- 楠済 淳三 A Comparative-Historical Study of Sound Changes in English and German on Graphemic Principles
- 正宗美根子 Contrastive Analysis of Transitivity of Verbs in English and Japanese—Generative Approach—

教育実習報告

67年度は前年度に引き続き9月に三鷹高校、豊多摩高校、杉並高校、三鷹市立第一、第二、第三、第四、第五、武蔵野第一、第二、および小金井東の各中学の協力を得て行なわれた。

1. 実習生総数 57 (男子13, 女子44)
2. 実習日程 9月11日(月)～9月23日(土)を中心に9月4日～23日まで
3. 実習配当校

教科	実習校	三鷹高校	豊多摩高校	杉並高校	三鷹一中	三鷹二中	三鷹三中	三鷹四中	三鷹五中	武蔵野一中	武蔵野二中	小金井東中	計
英語		7	3	2	4	5	5	5	4	7		3	45
社会			1			2		2	2		2		9
理科					2								2
数学												1	1
計		7	4	2	6	7	5	7	6	7	2	4	57

今年は大学の異常事態後、未だ変則授業最中にもかかわらず、実習生は各自よく黒田講師指導の下その効果をあげることが出来たことは大変よろこばしいことだと思う。

68年3月新卒者については東京都の公立高校教師の募集人員が僅少であったため、本学学生も中学に集中、近県の公立中学にも合わせて数名合格した。その中実際に就職した者は公立高校英語教師1、理科1、公立中学英語1人(実際には小学校に割り当てられた)、私立中・高英語5人、数学1人合計9人の新しい教師が巣立つことになった。

ひ　と　の　う　ご　き

○新任・帰任・辞任

岡部弥太郎教授（教育心理学客員教授）：1967年3月14日急逝。

小島軍造教授（教育哲学）：1967年3月停年のためいったん退職，のちICU大学院兼任教授となる。

西本三十二教授（視聴覚教育）：1967年3月停年のため退職，帝塚山学院大学学長に就任。

長清子教授（教育思想史）：1年半にわたるアメリカプリンストン，ハーバード両大学での研究生活を終え，1967年2月帰任。

川瀬謙一郎助教授（教育哲学）：ハーバード大学研究員としての留学生生活を終え，1967年8月帰任。

星野命助教授（人格心理学）：京都大学人文科学研究所における流動研究期間を終え，1967年10月帰任。

マリー・ベール助教授（教育心理学）：停年のため1967年3月退職，韓国梨花大学に赴任。

ヘルムント・モーズバッハ助教授（教育心理学）：1967年3月南アフリカ連邦共和国より来日，教育心理学担当助教授として着任。

原喜美助教授（教育社会学）：ミシガン州立大学での3年間にわたる留学生生活を終え，1967年9月帰任。

石本菅生助手（視聴覚教育）：1967年6月米国インディアナ大学に留学のため辞任。

岡本智子秘書：1967年7月着任。

小泉ナヲ子秘書：1967年10月語学科より配置換え。

岩田みよ秘書：1964年8月学務事務部へ移動。

○海外出張・休職

都留春夫教授（教育心理学）：1967年7月より日本政府派遣教授としてフィリピン Ateneo de Manila 大学で「日本の教育」を担当，このため約1年半休職。

原島鮮教授（理科教育）：1967年にオランダで行われた International Union of Pure and Applied Physics に出席のため渡欧。